

[研究ノート]

藤代禎輔の業績再評価について（中間報告）

中 島 正 道

1) はじめに

千葉県（県庁）企画部県民課（編集）『千葉県の先覚』1974年刊では100人の先覚者を顕彰し、その中には「ドイツ文学の先覚者としての藤代禎輔」が含まれていた。藤代顕彰文の後半では、万葉集の独訳に取組んだ藤代の人生の意義は大きかったと力説されている。その後の千葉県庁ほかからの『千葉県の先覚』の後継刊行物では、藤代の万葉集独訳の試みについての言及は著しく減少している。本報告は、藤代の試みの再評価のための資料を提出しようとするものである。

藤代は千葉市検見川で、1868（明治元）年、生まれる。1891（明治24）年、東京帝国大学文科大学ドイツ文学科第一回生として卒業。1889（明治22）年カール・フローレンツがドイツより赴任し文科大学教授となっており、藤代は三歳年長のフローレンツの指導を受けつつ大学院生として学ぶこととなった。

フローレンツは藤代に対し「万葉集を研究するので、まず藤代君がドイツ語訳を作成し

なさい。ドイツ語の仕上げは私が引き受ける。」との意を示した。

藤代はそれまでに万葉集を読んだり学んだりしたことが無く困惑したが、偶然にも、文科大学の木村正辞教授が大学院生向けの「万葉集入門」講義を開講されることが判明したので、「(木村先生の) 講義を聞くことは造作なく出来るから、其受売でも宜ければお引受ませう」（藤代禎輔「F先生と万葉の生口爵」『独訳万葉集第五巻鈔』P.31）とフローレンツへ答えた。このような次第で、万葉集第五巻独訳への一次草案を作成したと言う。

藤代は、1896（明治29）年第一高等学校教授となり、1900（明治33）年より二年間ドイツ留学、帰国後1907（明治40）年京都帝国大学教授となった。1920（大正9）年7月学術視察のため各国に出張、1926年（大正15）年1月より、藤代禎輔（監修）「独逸文学叢書」（全14巻）岩波書店、刊行開始。1928（昭和3）年2月まで。極めて良心的な厳格とも言える監修ぶりであったと言う。1925（大正14）年春以降、たびたび身体各処にがん発病があり、入退院を繰り返したが、軽いユーモアを口にしてまぎらわし、病苦とたたかいながらも、それを外面に見せな

かった。1927（昭和2）年4月18日、満58歳にて京都大学病院で死去。

昭和女子大学近代文学研究室（編）『近代文学研究叢書第26巻』は昭和期第一巻として、昭和2年1月から同年4月までに歿した5名の文学者についての調査研究結果を収録している。その5人目が藤代禎輔で雅号が「素人（そじん）」である。藤代の担当者の次の人物評は、引用されることが多い。

「禎輔は純粹の詩人たるには余りに理智が明哲で、学究的思索家というには余りに豊かな詩情の持主であった」（同書、273頁）

藤代の死去の後、著者が藤代であることを明示して公刊された著作は次の2点である。

1. 藤代禎輔『鵝筆余滴』弘文堂、1927（昭和2）年6月
2. 藤代禎輔博士遺稿『独訳萬葉集第五巻鈔』藤代博士記念事業会（独逸文科研究所内）1939（昭和14）年8月

1、2共に藤代の主著と言うべきものであるが、彼の業績を21世紀初頭において再評価を試みる上で特に重要なのは2である。2は「右開き（和文50頁）、左開き（独文36頁）」の2部構成となっている。和文中には、初めに「新村出執筆の題言」が収められ、この本の重要性が的確に示されている。

左開き（独文36頁）こそは藤代が大学院生時代にフローレンツの要請を受けて取り組んだ「萬葉集独訳」の姿を、1920（大正9）年学術視察のために各国に出張した際にフローレンツの助力を受けて再現しようとペンを走らせたものに最も近似している「萬葉集独訳第五巻」の唯一の出版物である。

1929（昭和14）年2月9日、「ドイツのハムブルク市からカール・フローレンツ師の訃

が伝えられた」と、藤代博士記念事業会の代表者成瀬清氏は、この本の「和文あとがき」中で記している。（同書38～39頁）ハムブルク市あるいはその近傍の図書館・文書館の奥深くに藤代の、大学院生になったばかりの時に開始された萬葉集独訳の大作業の第一次草案が、ドイツに帰国（1914年）したフローレンツの添書き付きで秘蔵されている可能性は現時点でも絶無とは言うべきでないだろう。

その可能性を追求し続けるためにも、当方は1920年の藤代・フローレンツ共同作業の「独訳萬葉集第五巻」を丁寧分析し続けなければならないのである。このような観点から本学におけるドイツの詩および文学について長く業績を積み上げてこられた鈴木邦武先生に同書中の左開き（独文36頁）部分をお目通し願いたい旨の面談を1ヵ月に1～2度くらいの間隔で実行し続けてきた。難点は、全国の大学図書館・公共図書館の藤代禎輔博士遺稿『独訳萬葉集第五巻鈔』所蔵館が少ない上に、全ての館が貴重書扱いとなっていて、電子図書閲覧にも大変厳しい制約があることだった。

6月下旬に突然朗報が飛び込んで来た。都内K書店（古書専門）の目録に同書が出たとのことであった。直ちに慎重に交渉し、購入に成功した。比較的安く、本の状態も良かった。夏休み中に、猛暑の上に、公務ご多忙中を鈴木邦武先生としての率直なレポートとして当センター宛に8月末にご提出頂くことができた。真に有難いことであった。次項2）に「藤代禎輔訳獨訳萬葉集第五巻鈔について」（鈴木レポート）を収録したのでご覧頂きたい。

2) 藤代 禎輔訳獨訳萬葉集 第五卷鈔について

ここでは『藤代 禎輔博士遺稿 獨訳萬葉集第五卷鈔』中に収められているドイツ語の部分についてとりあげる。

まず序文の中で編集者は貴重な友人であり、教師でもあった藤代教授を追慕しつつ没後12年目を記念するために、故人が残した遺稿の中にあつた、慎重に試みられた万葉集の第5巻の翻訳を出版することになったと述べている。そして、「識者はこの広い知識を持った故人によって編纂された純粋に日本的な、つまり全く非西洋的な作品の魅力や価値を、おおまかな翻訳であっても、十分に評価することができるであろうから、訳出されたものに手を加えずに出版した」としている。

編集者が「おおまかな翻訳 (Rohübersetzung)」と言っているとおりここにあるものは完成されたドイツ語訳ではない。恐らくは、藤代が万葉集の翻訳を行っていた恩師フローレンツ (Florenz, Karl, 1865-1939) のために作成した翻訳のためのノートといった類のものと理解される。

そのように思われる根拠をいくつか挙げてみると以下ようになる。

- 1) 藤代は万葉集第五巻を独訳するに当り、その内容を1(793) から91(904) に番号を付けて分類しているが、そのうちで2、13から44まで、46から51、53から55、58、60から62、64から66、69、71、72、74、75、77、79から85、88から90が欠けていおり、欠けた部分を合計すると65あり、全体の約70パーセントにな

る。

- 2) 12は、「梅花の歌32首並びに序」となっていて815から846が纏められていて1(815) から番号が付され、そのうちの1(815) から11(825) が省かれ、また、13(827) から16(830) (ここには「省略」と記されている)、18(832) から23(837) まで、25(839) 以下が省略されていて、取り上げられているのは三つだけである。
- 3) 12の中の17(831) と24(838)、また全体としてまとめられているもののうちの56(857)、57(858)、68(869)、73(874)、76(877) は語句の説明だけになっている。
- 4) 45(847) では「私の全力が極度に衰えてしまった (mein Vollkraft ist äusserst gesunken)」と記されている。
- 5) 訳出されたそれぞれの歌の前には、その歌の中で用いられている語句の説明がつけられている。これなどはフローレンツにとっては非常に役立ったことだろうと推定される (フローレンツには『古代日本の歌集、古今集のための辞典 (Wörterbuch zur altjapanischen Liedersammlung Kokinshu 1925)』という著書もある)。
- 6) 枕詞であることの指摘とそれについての説明がみられる。
 - 3(800) :
mochidori no
(MAKURA KOTOBA zu kakaru)
Vogelleimvogel (とりもちに掛かった鳥)
 - 5(804) :

shirotaheno
 (MAKURA KOTOBA) weisstuchig
 (白い布のような)
 minanowata
 MAKURA KOTOBA zu Kuro
 (Schwarz) : Eingeweide einer
 Molluske Mina (軟体動物ニナ [蛸])
 の内臓、はらわた)
 7(808-809) :
 shikitahe no
 (MAKURA KOTOBA) zu makura
 (Kopfkissen) ; feintuch (織目の細かい
 布)
 91(904) :
 sakikusa no
 (MAKURA KOTOBA zu naka) dieser
 ; derselbe (この)
 ohobune no
 (MAKURA KOTOBA zu tanomu) :
 sich verlassen (信頼する)
 tamakiharu
 (MAKURA KOTOBA)
 tama = Seele (魂)
 kiharu (kiwamaru) = d.h. bis an das
 äusserste Ende kommen. (極限に至
 るまで) Das Ganze bedeutet : die
 ganze Lebensdauer. (全体としては全
 生涯をかけて)
 Also tamakiharu inochi : etwa das
 Leben, worin die Seele aufgeht (von
 Mabuchi) (つまり tamakiharu inochi
 はいわば魂が尽きるまでの命)
 7) ドイツ語で説明が困な事柄に漢字を用い
 ての説明を加えている。
 5(804) で「八代の辛苦」について、

die acht grossen Sorgen (d.h.
 1.Leben; 2.Alter; 3.Krankheit; 4.Tod;
 5.Trennung der Liebenden;
 6.Zusammenkommen der Hassenden;
 7.Streben nach dem Unerlangbaren;
 8.五陰盛 Vorherrschen der fünf
 Eigenschaften: a. sinnliche Welt; b.
 Sinnlichkeit; c.Denken; d. Handeln;
 e.Wissen)
 (八つの大きな不安 (つまり、1. 生 ; 2.
 老 ; 3. 病 ; 4. 死 ; 5. 愛する者同士の別
 離 ; 6. 憎むもの同士の集合 ; 7. 入手し難
 いものへの希求 ; 8. 五陰盛 五つの特性
 の優勢 a. 色(物質) ; b. 受(印象・感
 覚) ; c. 想(知覚・表象) ; d. 行(意志な
 どの心作用) ; e. 識(心))
 63(864) で
 秦初、ein anderer Name des 夏侯玄、
 von dem man sagte, er hätte Sonne
 und Mond im Busen, weshalb er so
 heiter war.
 (秦初、夏侯玄の別名、彼は太陽と月を
 ふところの内にもっていたので、とても
 明るかったといわれている)
 楽康 war ein Mann von Chin 晋, von
 ihm sagte 衛瓘 : Wenn man ihn
 sieht, so scheint es, als ob man
 Wolken und Nebel auseinander teilte
 und blauen Himmel erblickte.
 (楽康は晋の人、彼について衛瓘 [エイ
 カン、西晋の政治家、書家、220-291]
 は言っている : 人は彼を見ると、あたく
 も雲と霧を分けて、青空をみる思いにな
 る。)
 次にドイツ語訳された歌を少しく観察して

みる（以下引用するもとの歌は『新日本古典文学大系 1』岩波書店刊行1999年による）。

1(793) 世の中は空しきものと知る時しいよ
よますます悲しかりけり

Gerade da, wo man einsieht, dass die Welt (yoononaka) etwas ganz Eitles sei, ist es umso trauriger. (世の中が全く空しいものと分ったまさにそのようなとき、ますます悲しい思いがする)

4(802) 瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば
まして偲はゆ いづくより来たりしものそ
まなかひに もとなかかりて 安眠しなさ
ぬ

Wenn ich Melonen esse, so denke ich an meine Kinder. Wenn ich Kastanien esse, so sehne ich mich noch viel mehr nach ihnen. Woher sind sie gekommen? (Wie ist das Verhältnis zwischen Vater und Kindern entstanden?) Sie schweben unaufhörlich vor meinen Augen, und ich schlafe keinen ruhigen Schlaf. (瓜を食べると子供たちのことが思い出される。栗を食べるとなお一層彼らのことが偲ばれる。どこからやって来たものなのか。(父と子供の関係はどのようにして生じたものなのか。) 彼らは絶えずわたしの目の前に浮かんで来て、私は安らかに眠れない。)

反歌(803) 銀も金も玉も何せむに優れる宝子
にしかめやも

Wozu Silber, Gold und Edelsteine!
Keinen besseren Schatz [gibt es] als Kind, welchem nichts gleichkommt.
(銀も、金も、宝石も何の訳にたとうか。
なにものもくらべられない子供に優る宝は

ない。)

91(904) 男子、名古日を恋ひし歌三首長一
首、短二首

世の人の 貴び願ふ 七種の 宝も我は
何せむに 我が中の 生まれ出でたる 白
玉の 我が子古日は 明星の 明くる朝は
しきたへの 床の辺去らず 立てれども
居れども ともに戯れ 夕星の 夕になれ
ば いざ寝よと 手を携はり 父母も う
へはなさがり さきくさの 中にを寝むと
愛しく しが語らへば いつしかも 人と
なり出でて 悪しけくも 善けくも見むと
大船の 思ひ頼むに 思はぬに 横しま風
の にふふかに 覆ひ来ぬれば せむすべ
の たどきを知らに 白たへの たすきを
掛け まそ鏡 手に取り持ちて 天つ神
仰ぎ乞ひ禱み 国つ神 伏してぬかつき
かからずも かかりも 神のまにまにと
立ちあざり 我乞ひ禱めど しましくも
良けくはなしに やくやくに かたちつく
ほり 朝な朝な 言ふこと止み たまきは
る 命絶えぬれ 立ち躍り 足すり叫び
伏し仰ぎ 胸打ち嘆き 手に持てる 我が
子飛ばしつ 世の中の道

Selbst die sieben Schätze, welche man hoch schätzt und [zu haben] wünscht, was fange ich damit an?

Mein Sohn Furubi [lieb wie] weisse Perlen, der zwischen uns geboren ist, verlässt am Morgen, wenn der Morgenstern hell scheint, die Nähe (be von toko no be) [meines] Bettes von feinem Tuch nicht und spielt [mit mir] zusammen, stehend und sitzend.

Wenn es Abend wird, und der

Abendstern [am Himmel scheint], so spricht er lieblich, indem er seine Hand in unsere Hand schlingt: "Nun geht zu Bette! Ihr Eltern, verlasst meine Seite nicht. Ich möchte in der Mitte [vom dreistengligen Sakikusa] schlafen." [Dies hörend] hoffte ich in festem Glauben, worauf ich mich wie auf ein grosses Schiff verliess. Das Schlechte und das Gute (seiner Zukunft), wenn er ein Mann geworden ist, persönlich zu erblicken. Aber da kam unerwartet ein plötzlicher Wirbelwind mich befallend; da wusste ich nichts zu tun. Den weissstuchigen Aufschürzer tragend und holden Spiegel in der Hand haltend flehte ich zu den Göttern des Himmels, indem ich hinaufblickte, und flehte die irdischen Gätter an, indem ich mich auf den Boden niederwarf. Während ich sie so heftig anflehte, alles dem Gefallen der Gätter überlassend, ob sie [meine Bitte] gewähren wollten oder nicht, wurde er selbst für eine kurze Weile nicht besser. Allmählich magerte seine Gestalt ab, mit jedem Morgen hörte er mehr auf zu sprechen, und sein Leben, worin die Seele aufgeht, erlosch. Da sprang ich auf, schrie und stampfte, sah hinauf und hernieder und klagte, die Brust mit der Hand schlagend: "Ach, meinen Sohn habe ich aus der Hand verloren. Ach! So ist die Weltordnung." (世間の人々が、尊んで手に

入れたいと願う7種の宝も、私には何になろう。私たちの間に生まれた、白い真珠のような我が子古日は、明けの星の輝く朝になると良質の布でできた私のしとねの側から離れずに、立ちながらでも座っていても一緒に遊んだ。

夕方になり、宵の明星が空に現われると、手を私たちの手にかからせて「さあ寝ましょう、お父さんもお母さんも私の側からはなれないで。私は[3本の枝のサキクサの]真中で寝たいのです」と可愛らしく言った。[これを聞いて]私は、成人したらこの子の将来の良いことも悪いことも自ら見られることを、大船に身を任せるように硬く信じて願っていた。だがそんな時、突然急激な旋風が私を襲ってき、私は致しようがなかった。私は白いたすきを掛け、まそ鏡を手に持って、仰ぎ見つ天の神に祈り、また、地面に身を投げ出して地の神に祈った。私の願いが聞き入れられるかどうか、すべては神様の御心のままだと取り乱して祈ったけれども、我が子は少しの間も良くはならなかった。次第に彼の体はやせて行き、朝ごとに話すことは止めてき、魂が昇ってしまった彼の命は尽きてしまった。そこで私は躍り上がり、叫び、足踏みして、てんを仰ぎ地に伏して、手で胸をたたきながら嘆いて言った「ああ、私はこの手から私の息子を失ってしまった。ああ、これが人の世の習いなのだ」と。

最後の「我が子飛ばしつ」の部分については、語句の説明のところでは、「本来は飛ばす (eigentlich : fliegen lassen)」と並べて「失う (verlieren)」も挙げている。「手の中にあつた我が子の魂が鳥のように飛んでいっ

てしまった」ということをドイツ人にも分ってもらうために「失う」と訳したのであろうか。

反歌(905) 若ければ道行き知らじ路はせむ下への使ひ負ひて通らせ

Da er jung ist, kennt er gewiss nicht den Weg. Ich will dir Geschenk geben. Oh du Gesandter der Unterwelt, trage ihn hinüber! (幼いのであの世への道はしらないだろう。贈り物をします。おお、冥土の使いよ、あの子を連れて行ってください。)

反歌(906) 布施置きて我は乞ひ禱むあざむかず直に率行きて天路知らしめ

Weihtücher darbringend flehe ich an. Führt ihn direct hinüber, wie es heisst (azamukazu, azamuku: lügen) und lasset ihn den Himmelsweg wissen! (布施を供えて私は乞いいのります。あらぬ方に誘わないでまっすぐに連れて行って、あの子に天上への道を教えてやってください。)

以上、万葉集第5巻のわずか3分の1の部分を手掛かりにするのであるけれども、藤代禎輔による万葉集独訳の試みを辿って見て、そこから彼の豊富な詩情と共に彼の万葉集理解への努力、そしてそれをドイツ語に翻訳するのに際して出来るだけドイツの読者の理解を勝ち取るために払った努力を窺い知ることが出来るのである。と同時に、彼のフローレンツに対する深い友情を感じ取ることが出来る。

日本にドイツ語並びにドイツ文学が紹介され始めた頃、当時の学徒は様々な困難を克服してドイツ文化の受容に励んだ。そのような

努力を払いながら同時に藤代は日本文化のドイツへの紹介のために尽力したのだった。その痕跡を辿りながら、われわれは日本におけるドイツ文学界の先駆者藤代禎輔に深い感謝と敬意を払わざるを得ない。

3) 残された課題

鈴木レポートを藤代再評価のために収録提出させて頂くことをお許し頂きたいと思う。

なお残された課題に含まれるものとして、次の4項をあげておきたい。

①リービ・英雄『万葉集(1～5巻)の英語訳』プリンストン大学出版会、1982年

② 〃 『英語でよむ万葉集』(岩波新書)2004年

③リービ・英雄の方向性と藤代禎輔のなしえたことの対比。

④木村正辞と万葉集略解
未筆ながら

四街道市図書館、千葉県立中央図書館、本学図書館の関係者各位に心より感謝申し上げます。

鈴木邦武先生よりのお力添えに最後に、最大の感謝を申し上げます。